

北海道文教大学 外国語学部

2022 (R4) 年度

自己点検・評価報告書

2023 (R5) 年 5 月 10 日

北海道文教大学

基準 1 理念・目的

点検・評価項目① 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

評価の視点 1 学部においては、学部、学科又は課程ごとに、研究科においては、研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の設定とその内容

評価の視点 2 大学の理念・目的と学部・研究科の目的の関連性

1) 建学の精神

『清正進実』（北海道文教大学・明清高等学校・附属幼稚園の建学の精神）

鶴岡学園の創設者鶴岡新太郎・トシ夫妻の遺された学訓『清く正しく雄々しく進め』を源に、1999（平成 11）年「北海道文教大学」開学へと建学の灯火は引き継がれてきた。その精神は今日も 4 本の柱として、学園に集う皆の心に刻まれている。

その 4 本の柱とは

- ① 真理を探究する清新な知性
- ② 正義に基づく誠実な倫理性
- ③ 未来を拓く進取の精神
- ④ 国民の生活の充実に寄与する実学の精神

我々はこれを要約し『清正進実』と呼び習わし、建学の精神としている。

2) 北海道文教大学の教育理念・目的

豊かな人間性を涵養するため幅広い知識を授けるとともに、理念と実践にわたり深く学術の教育と研究を行い、国際社会の一員として、世界の平和と人類の進歩に貢献し得る人材の育成を目的とする。

3) 北海道文教大学の教育目標

本学園の建学の精神および本学の教育理念の根底を成すのは「未来を拓くチャレンジ精神」である。本学ではこの「未来を拓くチャレンジ精神」の下、実学の創生、伝承の拠点として発展するために中・長期的な目標を以下のように定めている。

- ① 科学的研究に基づく実学の追求
- ② 充実した教養教育の確立
- ③ 国際性の涵養
- ④ 地域社会との連携

外国語学部の教育理念と人材育成の目的

外国語学部の教育理念と人材育成の目的は、建学の精神並びに北海道文教大学の教育理念・目的に則り、実践的な外国語教育、とりわけ英語教育とそれを支える日本語教育を基本とし、高度かつ急速にグローバル化する時代に対応した教育活動を展開し、時代と社会の要請に応えようとするものである。

外国語学部では英米語コースと観光・ビジネスコースを併設するが、いずれのコースにおいても英語を重視する事は勿論、観光を素材としたテーマを、両コースの英語教育の中に多く取り入れている。外国語学部での学びを通じて、世界の舞台での勇気と自信を持ち立ち向かうことの出来る人材の育成を目的とする。

外国語学部は、学部改組により令和3年度から学生募集を停止したが、在学生には本学部の教育理念と人材の育成方針を踏襲継続していく。

(1) 教育目標

教育理念と人材育成の目的に基づき、外国語学部の教育目標は、「実践的な外国語教育を基本として、海外の国々や文化に対する高度な理解を養い、変遷著しい今日の国際化・情報化にふさわしい知性の探究・創造に努めるとともに、国際ビジネスに関する専門的な知識と技術を学び、国際社会の中で主体的に行動できる人材を養成する」となっている。

外国語学部の教育理念と人材育成の目的は、「本学の建学の精神並びに北海道文教大学の教育理念・目的に則り、実践的な外国語教育、とりわけ英語教育とそれを支える日本語教育を基本とし、高度かつ急速にグローバル化する時代に対応した教育活動を展開し、時代と社会の要請に応えようとするもの」と明示されている。これは、「本学の教育目標」である「科学研究に基づく実学の追求」、「充実した教養教育の確立」、「国際性の涵養」を外国語教育分野に具体的に適用したものである。

新しい時代に対応できる、実践的語学力と専門的知識を身につけ、世界の舞台で活躍できる人材の育成という目的は、十分に高等教育機関の目的としてふさわしい。

(2) 長所・特色

新しい時代に対応できる実践的語学力と専門的知識を身につけるため、観光関連科目などもすべて英語で学ぶほか、多くの英語能力試験関連科目が用意されている。

また、2022年度は新型コロナウイルス感染拡大防止措置が緩和されていなかったが、協定大学の語学研修へ派遣することができた。オンライン留学も実施した。

(3) 問題点

特になし。

基準 4 教育課程・学習成果

点検・評価項目① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

評価の視点1 課程修了にあたって、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果を明示した学位授与方針の適切な設定及び公表

外国語学部国際言語学科のディプロマポリシー(DP)は、

① 知識・技能

- ・英米語コースでは、英語を実践的に運用できる知識とスキルを身につけている。
- ・観光・ビジネスコースでは、グローバルに展開する当該業界を理解し、実践に応用可能な知識および英語の技能を身につけている。
- ・4技能(聴く、話す、読む、書く)の運用能力を高め、実践の場で活用することができる。
- ・目指す産業界が求める技能に習熟し、実践の場で活用することができる。

② 関心・意欲・態度

- ・グローバル社会の人々と信頼関係を構築し、異文化社会に対する正しい理解と協調の精神を持つことができる。
- ・日常生活で適切な道徳観、倫理観を持ち、主体的に行動する。

③ 思考・判断・表現

問題解決のために必要な情報を収集分析し、適切な判断を主体的に下すことができる。

となっている。

外国語学部国際言語学科のディプロマポリシーは大学ホームページに公表しており、広く社会に公表されている。

点検・評価項目② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

評価の視点1 下記内容を備えた教育課程の編成・実施方針の設定及び公表

- ・教育課程の体系、教育内容
- ・教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等

評価の視点2 教育課程の編成・実施方針と学位授与方針との適切な連関性

国際言語学科のカリキュラムポリシー（C P）は次のように定められている。

国際言語学科は、本学の地理的特性を生かすために、英米語コースと観光・ビジネスコースを設け、大学での学びと自らの進路が効果的に連動するよう、教養科目と専門科目からなる。

(1) 教育内容

① 知識・技能

- ・英語の4技能の運用能力を高めるために「語学重点」の科目群を配置する。
- ・英語を媒体として観光を学ぶ科目として「All English」の科目群を配置する。
- ・英語を学ぶ上での前提となる正しい日本語を理解することを目指すために「日本語」の科目群を配置する。
- ・英米語コースでは学んだ英語を手段として、自己の主張・目的を達成する能力を養成するために「英米語」科目群を配置する。
- ・観光・ビジネスコースでは、北海道の持つ観光資源を理解し、これを国内外に広く発信し、ビジネスにつなげていく能力を養成するための「観光・ビジネス」の科目群を配置する。

② 思考・判断・表現

- ・学生の主体的な学習能力を育成し、豊かな学生生活を送れるように、1年次に「基礎ゼミ」を配置する。

③ 関心・意欲・態度

- ・異文化社会に対する理解と協調の精神を培う科目として異文化理解論、国際関係論等の科目を配置する。
- ・適切な道徳観、倫理観を養うための科目を「日本語」分野の中に複数配置する。

(2) 教育方法

少人数教育による、きめ細かな指導を行い、実践的な能力の向上をはかる。

外国語学部における教育課程は、(1)教養科目、(2)専門科目から構成されている。教育内容はカリキュラムポリシーの中で対応させている「教育課程の基本方針」の中で示されている。

(1) 教育課程の編成内容

外国語学部国際言語学科の具体的な教育課程の編成内容は『学生便覧』の「教育課程の構成と概要」に明示されている。

また、科目区分、必修・選択の別、単位数、配当年次および学期を、北海道文教大学学則、別表第1に明示している。

外国語学部国際言語学科の教育課程は、(1)教養科目(2)専門科目から構成されている。

外国語学部において教養教育は大学での学修における基盤の涵養と、社会に出たのちを見据えた教養に主眼をおいている。そこで、教養科目は「基礎科目」、「スポーツと健康」、「外国語」、「キャリア教育」の4分野から構成されており、それぞれの分野の内容は以下のようになっている。

「外国語」分野においては、中国語を配置して観光への需要に対応している。また、「キャリア教育」の分野を設けることにより、学生の多様な進路へ対応をしている。さらに「基礎科目」分野の中に「基礎ゼミ」を配置し教育課程の基本方針のひとつである「学生の主体的な学習能力の育成」を具体化している。

外国語学部国際言語学科の専門科目の授業科目区分と内容は以下のようになっている。「語学重点」、「英米語」、「All English」、「日本語」、「観光・ビジネス」、「実践」の6分野からなり、学士課程教育に相応しい教育内容を提供している。

「語学重点」分野では、「英語多読」「スピーキング」「アカデミックライティング」等を通じて「読む・書く・聞く・話す」ことを集中的に実践し、並行して「総合英語」「観光英語」「実践英語」を学ぶことで、英検や観光英検、TOEIC等、具体的な英語能力の獲得を図る。

「英米語」分野では、学んだ英語を手段として、自己の主張・目的を達成する能力を養成するため、「スピーチ」や「ディスカッション」、「ディベート」を学ぶ。

「All English」分野は、英語を媒体として観光を学生主体の授業方法で学ぶ科目群である。ここには、「世界遺産」「北海道の観光」「国際関係論」「地域研究」等の科目群が配置されている。

「日本語」分野は、英語を学ぶ上での前提となる正しい日本語を理解することを目指す科目群である。また、中学校及び高等学校の国語科教員を目指す学生には、これら日本語

分野科目を履修することが必須となる。

「観光・ビジネス」分野には、北海道の持つ観光資源を理解し、これを国内外に広く発信し、ビジネスにつなげていく能力を養成する。本分野には国家資格である国内(総合)旅行業務取扱管理者試験に対応する科目群および、民間資格である観光実務士資格の取得を可能とする科目群が含まれる。

「実践」分野では各種資格・検定に合格した際に単位認定する「資格・検定Ⅰ～Ⅳ」を配置。また、語学留学及び海外での各種研修等に対応した「国際言語研修Ⅰ～Ⅳ」、大学で学んだ知識を実社会で実践することを評価する「総合実務実践Ⅰ～Ⅳ」を配置する。

国際言語学科のカリキュラムポリシーに対応している「教育課程の基本方針」とディプロマポリシーが対応している項目を以下の表に示す。十分に整合しているといえる。

教育課程の編成・実施方針(カリキュラムポリシー)	学位授与方針 (ディプロマポリシー)
<p>1. 英語の4技能の運用能力を高めるために「語学重点」の科目群を配置する。</p> <p>2. 英語を媒体として観光を学ぶ科目として「All English」の科目群を配置する。</p> <p>3. 英語を学ぶ上での前提となる正しい日本語を理解することを目指すために「日本語」の科目群を配置する。</p> <p>4. 英米語コースでは学んだ英語を手段として、自己の主張・目的を達成する能力を養成するために「英米語」科目群を配置する。</p> <p>5. 観光・ビジネスコースでは、北海道の持つ観光資源を理解し、これを国内外に広く発信し、ビジネスにつなげていく能力を養成するための「観光・ビジネス」の科目群を配置する。</p>	<p>① 英米語コースでは、英語を実践的に運用できる知識とスキルを身につけている。</p> <p>② 観光・ビジネスコースでは、グローバルに展開する当該業界を理解し、実践に応用可能な知識および英語の技能を身につけている。</p> <p>③ 4技能(聴く、話す、読む、書く)の運用能力を高め、実践の場で活用することができる。</p> <p>④ 目指す産業界が求める技能に習熟し、実践の場で活用することができる。</p>
<p>6. 学生の主体的な学習能力を育成し、豊かな学生生活が送れるように、1年次に「基礎ゼミ」を配置する。</p> <p>7. 適切な道德観、倫理観を養うための科目を「日本語」分野の中に複数配置する。</p>	<p>⑤ 日常生活で適切な道德観、倫理観を持ち、主体的に行動する。</p> <p>⑥ 問題解決のために必要な情報を収集分析し、適切な判断を主体的に下すことができる。</p>
<p>8. 異文化社会に対する理解と協調の精神を養う科目として異文化理解論、国際関係論等の科目を配置する。</p>	<p>⑦ グローバル社会の人々との信頼関係を構築し、異文化社会に対する正しい理解と協調の精神を持つことができる。</p>

外国語学部の国際言語学科のカリキュラムポリシーは大学ホームページに公表しており、広く社会に公表されている。

点検・評価項目③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

評価の視点1 各学部・研究科において適切に教育課程を編成するための措置

- ・教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性
- ・教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮
- ・単位制度の趣旨に沿った単位の設定
- ・個々の授業科目の内容及び方法
- ・授業科目の位置づけ（必修、選択等）
- ・各学位課程にふさわしい教育内容の設定

＜学士課程＞初年次教育、高大接続への配慮、教養教育と専門教育の適切な配置等

評価の視点2 学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施

外国語学部は令和3年度から学生募集を停止したため、1年次、2年次に配当されている科目は学生の単位取得をもって修了した。

外国語学部の国際言語学科の教育課程は、(1)教養科目(2)専門科目から構成されている。

外国語学部において教養教育は大学での学修における基盤の涵養と、社会に出たのちを見据えた教養に主眼をおいている。そこで、教養科目は「基礎科目」、「スポーツと健康」、「外国語」、「キャリア教育」の4分野から構成されている。全学共通の教養科目としては、「総合教養講座」「日本国憲法」「統計の基礎」「情報処理Ⅰ」「情報処理Ⅱ」「生涯スポーツⅠ」「生涯スポーツⅡ」「中国語Ⅰ」「中国語Ⅱ」がある。

このうち「総合教養講座」は各学部・学科の専門的知識の学習に続く橋渡しを行い、学生のモチベーションを啓発し、豊かな人間性を養うことに主眼をおいている。また、「統計の基礎」はデータを分析しその統計学的根拠を示す力の育成、「情報処理Ⅰ」「情報処理Ⅱ」は社会に出て最低限必要となるコンピュータリテラシーを養成する。

「生涯スポーツⅠ」「生涯スポーツⅡ」はどの分野においても健康が基本であるため、スポーツ活動の意義、生涯にわたってスポーツを継続していくための基礎知識を養っている。これらはいずれも社会に出て必須となるものであり、学士教育に相応しいものである。

外国語学部では、教養科目で「キャリア教育」分野の科目を増やしている。また、「外国語」分野における中国語の科目を多数配置して観光への需要に対応している。さらに「基

礎ゼミ」の科目も配置している。

専門科目は「語学重点」、「英米語」、「All English」、「日本語」、「観光・ビジネス」、「実践」の6分野からなる。このうち「語学重点」「日本語」で英語と日本語のスキルを学修する科目群が1～3年まで配置されている。「英米語」は英語で自己を主張できる能力を養う英米語コースの科目群、「観光・ビジネス」は観光・ビジネスコースの科目群、「All English」は英語を媒体として観光を学ぶ科目群が配置され、教育課程の基本方針①地理的特性を生かして観光に重点、②英語教育に重点、③観光産業関連の資格取得を具体化している。「実践」は各種資格・検定取得時、海外研修等で認定される科目であり、これらに対するモチベーションを高めている。

順次性のある授業科目については体系的に配置することにより、学習効果を高める工夫を行っている。具体的には、(1)「スピーキングⅠ～Ⅳ」の科目のように同系統の科目には同じ名前をつけ、数字にて順次性を明示する、(2)総合英語Ⅰ→実践英語Ⅰ→総合英語Ⅱ→実践英語Ⅱの順で開講する科目のように科目名の異なる科目であっても、シラバスや科目一覧表（オリエンテーション時に配布）に他の科目との関連性（あるいは上位科目・下位科目とその連携）を示し、授業時でのオリエンテーションなどで学生に示している。

また、全科目に対して体系マップを作成しナンバリングによる体系化を行っている。

なお、初年次教育・高大連携に配慮した教育については、教養科目の「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」を設け、大学生としての心構えから、大学生としての勉強の仕方や、レポートのまとめ方、ゼミの発表の仕方などを系統的にかつ実践的に学ばせている。

また、英語補完講習科目として「英検2級特別講習」「観光英検3級特別講習」を設置していたが、令和3年度以降は、学年進行にともない対応する「総合英語Ⅰ」「観光英語Ⅰ」が終了している。

2018年度4月から学士課程におけるカリキュラムマップをシラバスの冒頭に提示した。カリキュラムマップはカリキュラム全体の構成を把握するためのもので、年次進行にしたがって関連のある科目を近い位置に表示するとともに、それぞれの科目が何を学ぶための科目なのか、どの学位授与方針（ディプロマポリシー）を達成するための科目なのかが示されている。さらに、専門科目や専門基礎科目と関連のある教養科目も示されている。これにより、教育の目的や課程修了時の学習成果と、各授業科目との関係が明確に示されている。

点検・評価項目④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

評価の視点1 各学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置

各学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るための措置（1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定等）

シラバスの内容（授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示）及び実施（授業内容とシラバスとの整合性の確保等）

学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法

<学士課程>

授業形態に配慮した1授業あたりの学生数

適切な履修指導の実施

大学の全学部および全研究科においてシラバス中の「授業の方法」において、①プレゼンテーションの方法、②授業形態、の他に③アクティブラーニングの取り入れの状況を記述するようになっている。また、2018年度から「課題に対するフィードバックの方法」欄が独立した項目となりフィードバックを学生に返すことにより学生が意欲をもてるように配慮している。

外国語学部においては、少人数クラス編成としている「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」において発表科目を中心とする授業の展開をしてきており、学生の主体的参加を促している。

また、1年次・2年次の語学科目における少人数クラス編成を徹底し、授業時以外にも教員の目が行き届くようにしている。たとえば「観光英語Ⅰ」「総合英語Ⅰ」「実践英語Ⅰ」などではe-Learning学習を導入しており、授業内のみならず、課外においてもe-Learning学習を行っており、その進捗状況を常にチェックできるようにしている。

国際言語学科のカリキュラムポリシーに従って教養科目、専門科目の教育方法は以下のようになっている。

教養科目では「スポーツと健康」分野、情報処理の科目では演習形式をとっている。教養科目の外国語分野の科目である「中国語Ⅰ」～「中国語Ⅷ」では言語面だけでなく、文化等多角的な視点を修得させるため講義形式をとっている。

専門科目では講義形式と演習形式をとっている。科目の内容によって適切に振り分けられている。すなわち、言語面の学修に重点をおいている「語学重点」分野の「総合英語Ⅰ」～「総合英語Ⅱ」、「観光英語Ⅰ」～「観光英語Ⅱ」、「実践英語Ⅰ」～「実践英語Ⅱ」は演習科目とし、週2回行われるため2単位となっている。また、「日本語」分野の「日本

語の表記と語彙」、「日本語表現技法Ⅰ」、「日本語表現技法Ⅱ」も言語面の学修に重点をおいているので演習科目となっており、それ以外の科目は講義形式となっている。したがって、講義か演習かについてはどんな学修に重点をおくかによって適切に振り分けられている。

また、国際化に対応した実践力を養うため、これまでのリーディング、ライティング、リスニング能力の向上を図る授業に加えて、「スピーキングⅠ」～「スピーキングⅣ」、「スピーチⅠ」～「スピーチⅡ」、「ディベートⅠ」～「ディベートⅢ」等、特にオーラル・コミュニケーションの力の育成を図るために、アウトプット能力の向上と、英語による授業の展開を行っている。

修得すべき学習成果を示すために、資格取得および卒業に必要な単位数、選択科目の履修方法等を学生便覧の「履修の方法」において明示している。

大学全体の方針により履修登録単位数の上限は、国家資格等関係科目、教職科目を除き44単位以内、各学期26単位以内となっている。

さらに、学科の学生・教員が全員出席する各学期はじめのオリエンテーションで、学年ごとに学科の基本的な教育目標とその達成までに必要な諸事項を『学生便覧』を用いて詳細にわたって説明し、学生間・教員間に誤解等がないように配慮している。

指導教員制度として大学の全学科においてクラス担任、アドバイザーを設けるとともに、週2コマ以上のオフィスアワーを設けている。

点検・評価項目⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

評価の視点1 成績評価及び単位認定を適切に行うための措置

- ・ 単位制度の趣旨に基づく単位認定
- ・ 既修得単位の適切な認定
- ・ 成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置
- ・ 卒業・修了要件の明示

評価の視点2 学位授与を適切に行うための措置

- ・ 学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示
- ・ 学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置
- ・ 学位授与に係る責任体制及び手続の明示
- ・ 適切な学位授与

外国語学部の成績評価は以下の「大学全体の成績評価の方法・基準」で示した評価の方法・基準に沿って成績を評価している。

また、シラバスに各教科について毎回の準備学習と事後学習を明示し、単位の実質化を

はかっている。既修得単位の認定も大学全体の基準に従っている。

【大学全体の成績評価の方法・基準】成績評価は本学の履修規程に基づき、各教員が事前にシラバス上で学生に公表した評価方法によって成績評価と単位認定を行っている。全学において授業科目の成績評価は、100点満点の60点以上を合格とし、AA(秀)(90点以上)、A(優)(80点以上90点未満)、B(良)(70点以上80点未満)、C(可)(60点以上70点未満)となっている。授業に病欠・公欠等で出席できなかった場合には、補習で対応している。

また、評価の結果合格点には達していないが一定の条件を満たしている者をいったんDH(不可保留)とし、補習等を経て当該学期内に再評価をする制度が設けられている。なお、DHの後再評価の結果合格となった場合の成績評価はCとなる。

履修した科目の成績が合格となった場合は、定められた単位数を履修者に与えている。なお、成績評価に疑義のある場合は、文書による疑義申し立てと担当教員からの文書による回答をすることを制度化し、学生と教員が相互に成績評価の適正性を確認している。

授業科目は、「講義」、「演習」、「実習・実技」に大別されており、1単位を修得するための時間は以下の表のようになっている。よって、いずれも1単位の授業科目に45時間の学修を標準とする大学設置基準の主旨に従っている。なお、本学では授業1回90分を2時間と計算する。2単位の講義形式の授業科目であれば15回で授業時間が30時間、したがって自習時間は1回4時間×15回=60時間が必要となると指導している。学生の予習・復習時間を確保するため、シラバスには毎回の授業ごとに準備学習と事後学習の項目を設けて学生が自習時間にすべきことをきめ細かく指示し、単位の実質化をはかっている。

授業形態	授業時間	自習時間	計
講義	15時間	30時間	45時間
演習	30～15時間	15～30時間	
実習・実技	45～30時間	0～15時間	

本学では、他の大学又は短期大学を卒業または中途退学している者に対する既修得単位の認定を行っている。また、他大学や短期大学との協議に基づき当該他大学または短期大学での授業科目の履修で修得した単位を本学での修得単位として認めている。これらにより与えることができる単位数は、編入学・転入学の場合を除き本学において修得したものとみなす単位数と合わせて60単位を超えないこととしている。

なお、国際言語学科においては、「国際言語研修Ⅰ～Ⅳ」や「総合実務実践Ⅰ～Ⅳ」など教育課程外における学生の自律的・自主的学習によるさまざまな学習業績の認定に応じて単位を取得する科目がある。ここでは、学科全体で評価し、学科会議・教務委員会・教授会の議を経て認定される。

国際言語学科においては交換留学等で修得した単位の互換については、「交換留学先が基

本的に学科の認定した教育機関であること、単位互換にあたりそれぞれの授業内容を精査すること、さらには留学先の授業時間数および評価の証明書を必要とすること」と学科内で共有している。これらに基づき、学科会議および教授会を含む関係諸会議の議を経て認定される。

外国語学部の学士（外国語）については、本学学則に基づき「本学に4年以上在学し、所定の単位を修得した者」について教授会の議を経て学長が卒業を認定し、学位を授与している。

国際言語学科の卒業・修了の要件については、各年度に配布される学生便覧の「履修ガイド」の履修の方法において科目区分別の必要単位数、単位の組み合わせの要件を詳細に記載して学生に明示している。

点検・評価項目⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

評価の視点1 各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定

評価の視点2 学習成果を把握及び評価するための方法の開発

《学習成果の測定方法例》・アセスメント・テスト・ルーブリックを活用した測定・学習成果の測定を目的とした学生調査・卒業生、就職先への意見聴取

外国語学部では、大学全体同様、学生の学習成果を測定するための指標である GPA (Grade Point Average) を導入している。

英語教育については、毎年学科全学生に英語プレースメントテストを受験させ、各年度の学生達の語学力を客観的に測定している。令和3年度以降は年2回、「TOEIC IP」を使用した英語プレースメントテストを実施した。

また、「英語検定」「TOEIC IP」などを通して学生の学力の伸びを把握するだけでなく、「中国語検定」や「漢字検定」などの語学能力テストや資格試験の結果に応じて単位認定を行うことにより、資格取得を奨励している。これによって単位認定された学生がこれまでに多数おり成果をあげている。

就職率は令和元年度から令和3年度の3か年で、国際言語学科において100%、96.4%、97.0%であり、きわめて高い就職率を維持している。

なお、学生の自己評価、卒業後の評価を調査する組織的な取り組みについては、令和3年度卒業生（2022年3月卒業）を対象に「学士課程教育卒業時アンケート」を実施した。

点検・評価項目⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点1 適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価

・学習成果の測定結果の適切な活用

評価の視点2 点検・評価結果に基づく改善・向上

教育課程及びその内容、方法の適切性は、各学科の学科会議の中で、教務関連事項として抽出されている。

カリキュラム改訂が必要となった場合、学部においては原案が学科会議で作成され、教務委員会、教授会の議論を経て決定される。カリキュラム改訂にともなう学則の変更は教授会の議により原案を作成し、理事会の議を経て行なわれている。

外国語学部国際言語学科では、平成28年度に大幅なカリキュラム変更を行い、科目の必修及び選択必修指定の見直しを行った。これまでのカリキュラムにおいては、言語教育が実質2年間で終了してしまうために学生の語学力の向上にも限界があり、6つのトラックに分かれた専門科目についても時間の制約上十分に掘り下げられているとは言えなかった。今回の新教育課程編成においては、中国語教育の比重を減らし、国際言語としての英語教育に大きく比重を持たせ、かつ、学部教育の全学年で語学教育を推進できる体制を構築した。

外国語学部国際言語学科では英語教育について、毎年学科全学生に英語プレースメントテストを受験させ、各年度の学生達の語学力を客観的に測定し学力に応じた教育を行ってきた。1年次から2年次にかけての教育成果の検証を学科会議によって行ってきた。令和3年度以降は年2回、「TOEIC IP」を使用した英語プレースメントテストを実施した。また、全学において給付している海外留学奨励金を、本学科ではプレースメントテストで上位の学生に給付し、語学研修に参加させてきた。

（2）長所・特色

国際言語学科では、教養科目に少人数で授業を行う「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」を設け、大学生としての心構えから、大学生としての勉強の仕方や、レポートのまとめ方、ゼミの発表の仕方などを系統的にかつ実践的に学ばせている。

大学全体の就職率（対就職希望者）は、令和元年度から令和3年度の3年間でそれぞれ99.8%、98.1%、99.2%で高水準を維持している。

新型コロナウイルス感染拡大防止措置による遠隔授業期ではあったが、本学では対面授業を行い、学習継続意欲の低下を軽減した。

(3) 問題点
特になし。

基準 5 学生の受け入れ

点検・評価項目①学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

評価の視点 1 学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表

評価の視点 2 下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定

- ・入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像
- ・入学希望者に求める水準等の判定方法

学部学科毎にアドミッション・ポリシーを定め、大学ホームページ（資料 学生募集要項 2019）及び「学生募集要項」で公表している。各学科共に 1. 本学科の教育目標 2. 本学科の教育方針 3. 本学科の求める学生像 4. 入学前指導 について明らかにしている。なお、障がいのある学生の受け入れについて、外国語学部は大学全体と同じである。

【外国学部 国際言語学科アドミッション・ポリシー（求める学生像）】

- ・自分の現状に満足せず、更に高い目標に向かって努力しようとする人。
- ・グローバル社会に相応しい語学力や業界知識を身につけ、世界の舞台で活躍したいと努力する人。
- ・仲間と協働することを楽しみ、自分と異なる価値観に対しても敬意を持てる人。
- ・大学卒業後に国際社会で即戦力となれる人材を育てるために、大学在学中での実践的な語学教育カリキュラムを希望する学生の入学を期待する。
- ・対人コミュニケーション、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートの基本能力を身につけ、ICTなどの知識を活用し、適切な情報発信ができる。

本学ホームページ「3つのポリシー」の「アドミッションポリシー」に「学力の3要素を踏まえた判定」の項目があり、

入学試験においては高等学校までに培われた学力の3要素に鑑み、各試験区分において求めた提出書類・面接・小論文・各教科目試験等の総合評価をもって合否を判定しています。と明記されている。

国際言語学科におけるアドミッション・ポリシーは以下の表のように、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに対応しており整合している。

学生の受け入れ方針 (アドミッション・ポリシー)	教育課程の編成・実施方針 (カリキュラムポリシー)	学位授与方針 (ディプロマポリシー)
<p>1. 高等学校までに履修した英語などの基本的な内容を理解し、高等学校卒業相当の知識を有している人。</p>	<p>1. 英語の4技能の運用能力を高めるために「語学重点」の科目群を配置する。</p> <p>2. 英語を媒体として観光を学ぶ科目として「All English」の科目群を配置する。</p> <p>3. 英語を学ぶ上での前提となる正しい日本語を理解することを目指すために「日本語」の科目群を配置する。</p> <p>4. 英米語コースでは学んだ英語を手段として、自己の主張・目的を達成する能力を養成するために「英米語」科目群を配置する。</p> <p>5. 観光・ビジネスコースでは、北海道の持つ観光資源を理解し、これを国内外に広く発信し、ビジネスにつなげていく能力を養成するための「観光・ビジネス」の科目群を配置する。</p>	<p>1. 英米語コースでは、英語を実践的に運用できる知識とスキルを身につけている。</p> <p>2. 観光・ビジネスコースでは、グローバルに展開する当該業界を理解し、実践に応用可能な知識および英語の技能を身につけている。</p> <p>3. 4技能（聴く、話す、読む、書く）の運用能力を高め、実践の場で活用することができる。</p> <p>4. 目指す産業界が求める技能に習熟し、実践の場で活用することができる。</p>
<p>2. グローバル社会に相応しい語学力や業界知識を身につけ、世界の舞台で活躍したいと努力する人。</p> <p>3. 自分の現状に満足せず、さらに高い目標に向かって努力しようとする人。</p> <p>4. 仲間と協働することを楽しみ、自分と異なる価値観に対しても敬意を持てる人。</p>	<p>6. 学生の主体的な学習能力を育成し、豊かな学生生活が送れるように、1年次に「基礎ゼミ」を配置する。</p>	<p>5. 日常生活で適切な道徳観、倫理観を持ち、主体的に行動する。</p>

<p>4. 対人コミュニケーション、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートの基本能力を身につけ、ICTなどの知識を活用し、適切な情報発信ができる人。</p>	<p>7. 適切な道徳観、倫理観を養うための科目を「日本語」分野の中に複数配置する。</p> <p>8. 異文化社会に対する理解と協調の精神を養う科目として異文化理解論、国際関係論等の科目を配置する。</p>	<p>6. 問題解決のために必要な情報を収集分析し、適切な判断を主体的に下すことができる。グローバル社会の人々との信頼関係を構築し、異文化社会に対する正しい理解と協調の精神を持つことができる。</p>
---	--	--

点検・評価項目②学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

評価の視点1 学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定

外国語学部の入学者選抜については大学全体と同様に2020年度から変更され、学校推薦型選抜、特待生選抜、総合型選抜、ディスカバリー育成型選抜、一般選抜、大学入学共通テスト試験利用選抜、特別選抜により選抜していた。学校推薦型選抜には一般と指定校が含まれる。総合型選抜はこれまでのA0入試に相当する。ディスカバリー育成型選抜は本学科の教員が受験生に対して入学基準に到達できるように、大学での学びに対する動機付けやプレゼンテーションを指導する育成型の選抜である。これにより、志望動機がより強固な学生を受け入れることができる。一般選抜ではA期3科目型、A期2科目型、B期2科目型、C期を実施していた。

令和3年度は学生募集停止のため、編入学試験のみとなった。

点検・評価項目③適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

評価の視点1 入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理

<学士課程>

- ・ 入学定員に対する入学者数比率
- ・ 編入学定員に対する編入学生数比率
- ・ 収容定員に対する在籍学生数比率
- ・ 収容定員に対する在籍学生数の過剰又は未充足に関する対応

外国語学部の学生募集を停止するまでの過去 5 年間の入学定員と入学者及び入学定員に対する入学者比率の平均値は、下表のとおりである。

【入学定員に対する入学者比率（過去 5 年間平均）】

学部学科	入学定員	入学者数					入学者計	入学者比率 (平均値)
		2017	2018	2019	2020	2021		
国際言語学科	100	56	54	48	53	募集 停止	211	0.528
外国語学部	100	56	54	48	53	募集 停止	211	0.528

外国語学部は入学者比率の平均値が 0.528 で、入学定員未充足の状態であるため、その原因を検証し、学科カリキュラム改革を 2016 年に行い、是正を進めていた。また、大学の収容定員に対する在籍者比率は、下表のとおりである。

【2021 年度の在籍学生数と収容定員に対する在籍学生数比率（2022. 5. 1 現在）】

学部学科	収容定員 (A)	年次別在籍学生数				在籍学生 数 (B)	在籍学生比 率 (B) /(A)
		1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次		
国際言語学科	200	募集 停止	募集 停止	50	52	102	0.51
外国語学部	200	募集 停止	募集 停止	50	52	102	0.51

外国語学部の在籍学生比率は 0.51 であり、編入学試験などで若干の補充があるものの収容定員未充足の状態である。編入学定員は若干名となっているが、3 年次の在籍者には 1 名の、4 年次の在籍者には 2 名の編入学生が含まれる。

外国語学部は 2016 年度よりカリキュラムの改訂を行い英語教育に特化する方針を打ち出している。十分に改革情報が浸透しているとは言い難く、入学定員に対する入学者比率の低さが是正されていない。

(2) 長所・特色

「英語」教育に軸足を定めたことにより、英語学習へのかつてない意欲的な取り組みが見られるようになった。

(3) 問題点

外国語学部では、教育改革することにより、入学者の英語能力等の一定の向上や成果が見られたが、学生充足率につながらなかった。

基準6 教員・教員組織

点検・評価項目④ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。

評価の視点1 ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の組織的な実施

FD研修会は外国語学部・国際学部合同で実施した。英語学の知見を英語授業に活かす教育実践の試みは、大いに刺激となった。

題目：「英語学を英語授業に活かす」

日時：2023年2月7日（火）10：00～10：50

場所：本学921教室

講師：本学教授 高橋保夫（英語学）

参加者：岡本佐智子、小山田健、小西正人、沢谷佑輔、常田拓孝、宮本融、矢部玲子、
魯諍、ENSLÉN Todd Robert、TOMASINE Josef Samuel、RICHARDSON Peter、
WALZEM
Allen George

（2）長所・特色

研究分野の異なる講師の講演や研究・教育実践は、多様な教育・研究手法や異なった視点などの刺激を受け、各自の教育、研究指導に応用できる。

（3）問題点

特になし。

外国語学部 自己点検評価実施委員

役名	氏名		
委員長	教授	高橋 保夫	国際言語学科
委員	教授	岡本 佐智子	国際言語学科